

特集

芸高創立 50周年

東京芸術大学
音楽学部附属
音楽高等学校の
歩みとこれから

二〇〇五年、音楽学部附属音楽高等学校が
創立五〇周年を迎えた。
半世紀にわたって、
優れた音楽家・教育者を輩出してきた
「芸高」の歴史と
新しい時代のなかで
果たすべき役割について特集する。



「座談会」

芸高の 歴史と展望

佐藤眞

粕谷美智子

松原勝也

山本文茂

創設の経緯。さまざまな思い出

佐藤 私は、芸高（東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校）の第一期生ということで、創立のいきさつからお話したいと思います。そもそも初代の校長を務められました声楽の城多又兵衛先生や作曲の下總皖一先生などが、芸大の音楽学部しもふさかんいちに附属高校の必要性を感じて、創設に踏み切られた。そのお考えのもとにあったのは、当時のヨーロッパではすぐれた



演奏家や作曲家が、幼少の頃から早期教育を受けている。そして、それを育てる公的な機関がある。にもかかわらず日本にはないということで、その必要性を痛感されておられた各科の先生方と話し合っ、意見を何回も文部省に提案し、ついに認可がおりた。下總先生から、そのように聞いております。

私自身は、一〇歳のときから下總先生に作曲の指導をいただきまして、高校受験の年になったとき、ちょうど新聞に芸高ができるという記事が載ったんですね。創立の年は、四月の下旬に入学式があったんです。私たちの代は、一年生のときは一年生だけ、二年生のときに一年生が入ってきて、三年生で三学年が初めてそろったわけですから、先輩がいらないという変則的な高校生活を送りました。

その当時、場所も上野ではなくて、お茶の水にあつた芸大の分教場を使つたんです。学校設立の認可は下りていたので、予算がゼロだった。ですから、改装工事ができないで、その校舎をそのまま使った。ピアノなどは古いものがあつたんですけど、教室の窓枠が錆びて、窓が開かない。そんなところで勉強をしました。

粕谷 私は六期生なんです、その頃になりますと、先輩がいらっしゃるので、今開校したばかりの学校という感じはもうなかったです。ただ、運動場といえるほどのものではない小さなスペースしかなくて、体操をするにしても、ほとんど道具はなかったですね。卓球室だけは



佐藤 眞 (さと うしん) 教授 作曲科/附属高校校長

一九三八年茨城県生まれ
一九五七年東京芸術大学音楽学部附属音楽高校卒業(第一期生)
一九六一年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業
一九六三年東京芸術大学専攻科修了
東京芸術大学音楽学部非常勤講師、助教を経て一九九二年より教授
二〇〇〇年より東京芸術大学音楽学部附属音楽高校校長

立派に一部屋あつて、それが唯一芸高生が休憩のときに集まる場所でした。

芸高については私はよく知らなかったんですね。ところが、あるときに、専門的に勉強するならば芸高に入らなければだめだよ、と作曲の池内先生にご指示をいただいて、小学校五年生のときに安川先生にレッスンを受けたのが始まりです。ソルフェージュを芸大の作曲科の学生に交じって日仏学院での宅先生のクラスレッスンを受けていたくらいで、芸高というところがどれだけすごいところか、何も知らないで、ただ楽しくかつ夢中になつて勉強していました。

松原 芸高に入るきっかけについてなんですけれども、私も粕谷先生と少し似たようなところがあるかもしれません。芸高、芸大の存在をほとんど意識したことがなく育ちまして、中学三年生になつてから芸高の存在を知り、慌てて先生についてソルフェージュを特訓して、何とかすべり込んだみたいな感じでした。

その頃の芸高は、昔の分教場だった雰囲気はまだ色濃く残っていたのではないかと思います。せいぜいバスケットコ

ート二面ぐらいの狭い運動場で、そこをぐるぐると何周も走らされる。渡邊高之助先生が校長、清野先生が副校長の時代だったんですけれども、音楽家は体力がなければいけないということで、体育に非常に力を入れていたようです。当時、体育の先生だった本田先生の一喝のもとに、テニスあるいは水泳の合宿、冬はスキーというふうに、音楽を練習している時間よりも体を動かしている時間のほうが多かったような、そんな記憶があります。

山本 芸高の創設にしまして、佐藤先生がおっしゃったように、日本では高等教育において音楽の専門家を育成するための公的機関がなかったんですね。歴史的には、芸大の前身である東京音楽学校の卒業生たちの「同声会」というのがありまして、その会が発案し、「上野児童学園」という音楽の専門教育を施す機関をつくりました。東京音楽学校の校地、校舎、施設を利用して、東京音楽学校の専門家の先生たちが若い子供たちを教えるという機関だったんです。昭和一〇年代くらいの話ですが、同声会と東京音楽学

校が協力関係を保って、相当高い成果を得ることで最高の環境ができたのですが、戦争のためにそれがなくなつてしまった。戦後になって、動きはあつたんですけれども、芸大ができてからもなかなか実現化しなかった。

そういう状況にあつて、戦前から戦後の皆さんが信じていた、音楽の専門家を育てるための原理が三つあるんですね。

第一が、「早期教育」。ヴァイオリンは三歳頃からとか、あるいはピアノは五歳六歳くらいから始めるとか、音楽の基礎の専門的な教育は早期教育が第一だという考えですね。音楽家の場合は身体の発達もありますが、高校生くらいから専門家になるための指導を受けて訓練を始める方もいますし、必ずしもすべてが早期というわけではないですけれども、早くから音楽の基礎を身につけるべきだということですね。第二に、「継続教育」。早く訓練を始めて、成人に至るまでそれを一貫して、すぐれた同じ先生が同じシステムで長期的に指導していく。あるいは同じ先生でなくても、同じような方法で、継続的に続けていく。第三は「個人教育」です。音楽の専門家の教育は、一対一で最高の先生とすぐれた弟子、その個人教育というのがなければいけない。集団で少数者クラスである程度できる教育もありすけれども、やはり根本は個人教育である。

早期教育、継続教育、個人教育というものがなければしっかりした専門家の育成はできないということが日本でも認識

されていまして、これは世界共通の原理でありまして、多くの先生方がそういう主張をなさってきたことが広く機運となつて、一九五四（昭和二九）年に音楽高校が発出したというふうに理解しております。

芸高生のプライドと心構え

佐藤 開校当時の芸高生活は、設備は劣悪でしたけれども、音楽に打ち込めるというので、すごく燃えて、充実した幸せな毎日でした。学科の先生も、上野からお茶の水まで片道三〇分かけて、芸大から高校に教えにきてくれました。PTAの組織である「響和会」から、先生方の交通費ぐらいは出たかもしれないけど、原則としては手弁当で来てくださったんですよね。本当にそれはありがたいと思っています。いろいろな情勢は悲惨と言つてもよくらいだったですけれども、生徒たちの精神状態は非常によかったです。

山本 私は佐藤先生と同じ、一九五七年に芸大に入学したんです。私は楽理科だったんですが、附属から来た佐藤先生初め仲間の人たちが本場に優秀で、こういう人々がいるんだと思いましたね。私は地方の高校の出身でしたから、まるで雲の上のようなばかりでした。先輩もまだいい高校で学び始めたという、新進気鋭の進取の精神を持って、意欲的に勉強をなさった人たちがもつ存在感をひしひしと感じましたね。

粕谷 佐藤先生がすごく幸せな高校生活だったとおっしゃいましたが、私はまわりを見ると幼い頃から芸高を目指していた人ばかりで、たいへん激しい競争のなかに放り込まれたと感じました。中学のときには、特技としてピアノが弾けるといことが自分の存在をアピールできる便利なものでもあった。学校からもある程度は目に見えてもらっていた部分もありました。芸高に入つて、それこそソックダウンされたという感じで、人前で音を出すことすら怖くなって、長い間、劣等感に悩みました。

今の芸高の人たちはみんなが仲良しでお互いを認め合える雰囲気になつていますが、その頃は競争心をむき出しにしていたように感じます。というより、私自身がまわりの実力に圧倒されて、そう感じていただけかもしれません。ですからこれから受験する人たちには、芸高というところは、とにかくまわりの人たちがすごいから、精神的に負けないような強さがないとやっていけないというのですが、今の人たちはそういう心配をしなくても、和気藹々と勉強していますね。そ

れはそれでいいとは思いますがけれど。
松原 芸高には、東京だけではなくて、全国から生徒が来るんですが、みんな一

国一城の主みたいな感じで、そういうプライドのぶつかりがありましたね。私の場合、芸高の一年のときから室内楽に積極的に取り組むことになつて、アンサンブルのリハーサルに励んだのですが、そのなかで、音楽的な信頼関係をどうやって築いたらいいのかということをお互いに模索したんです。その結果、「アカンサスコンサート」のような舞台で、特別な瞬間を共有した仲間として認め合うことができるようになりました。そこで充実感を味わつて、すばらしい人間関係が築けたことは、私にとつてはとても幸運だったと思います。

佐藤 親の反対を押し切つても音楽をやるんだというくらいの気持ちで、私たちの時代は芸高に入つたものですから、勉強に対して後には引けないみたいなものがあつたと思います。今の生徒たちに、そういう気持ちはあまりなくて、音楽という職業は、むしろ格好いいくらいに思っているところがあるかもしれない。け

れども、私たちの頃は、悲壮感みたいなものがありましたね。

粕谷 今の生徒たちを見ていてすごく幸せそうだし、たしかに悲壮感みたいなものはあまり感じられないですね。

それと、いちばん気になるのが、過保護な子どもたちが多いですね。小学生、中学生のときに、あなたは楽器が弾けるからほかのことはできなくてもいいわよ、というふうに育つてきてしまった。それが芸高では、地方から来る人も多いわけですから、どうしても一人で暮らさなくてはいけない。自分で自分をコントロールしながら学校生活を送るわけで、ずっと親元で何もしないで育ってきた人たちが、急に放り出されてうまくいくはずがないわけです。そういう問題を抱えて、迷っている生徒たちがいないとはいえませんが。

例えばヴァイオリンさえ素晴らしい弾ければ世の中に通じるというものではないと、つねづね思つたんです。その人から実技を取つたときに、一高校生として、一大学生として、社会に通じるような人間に育つていないと、本当の意味での音楽もやっていけないのではないか、というのが私の持論なんです。

だから、私は芸高の生徒に接するときに、あなたは優秀だからこれはできなくていいわということは許さないんです。ドアの出入りから服装のことからビビシ注意するので、生徒たちから敬遠されているんですけれども、だれかが言わなければいけないと思っています。演奏家



粕谷(多)美智子 (かすやあおののみちこ)
教授 器楽科(ピアノ)

一九四四年東京都生まれ。
一九六二年東京芸術大学音楽学部附属音楽高校卒業(第六期生)。
一九六六年東京芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。
一九六八年東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了。
一九六八年東京芸術大学音楽学部非常勤講師。
一九六八年ドイツ・シュトゥットガルト国立芸術大学演奏家コース修了。
一九八二年ドイツ・シュトゥットガルト国立芸術大学非常勤講師。
東京芸術大学音楽学部非常勤講師。助教授を経て二〇〇三年より教授。

とはいえ社会のなかで生きていかなければいけないわけで、ただ自分が上手く弾ければ聴衆がついてくるのではありません。オーケストラの人たちだとしたら、やはり一つの集団のなかで生活していかなければいけないのに、規律を守れないような人間ではやっていけませんよね。

山本 普通科の高校でも、教科の指導と生活指導をどういうふうに調和をとるかというのは大変な問題なんです。芸高では専門の教育がありますから、その三つの問題が互いに存在しているんですね。しかも、その三つが相互にかかわり合いを持っていくものだから、先生方のご指導も本当に大変なんです。

私が校長の時代には、アベレージとしては一般学科もできるし、専門も優秀で生活態度もよいという生徒のほうが多かったんですが、音楽の専門は優秀だが、生活指導の面ではどうかという生徒もなかにはいました。普通の高校だったらそういう生徒は切り捨てて行くんですけど、芸高の先生方は決して直接的な否定をしないで、全体を見て伸ばしてあげるといふ面がある。ただ、それに生徒のほうで甘えている側面もあるのかも思います。

松原 今の学生を音楽家として見た場合に、とても能力が高くて、理解力が早くて、吸収力もすごくあるのに、どこかで抜け落ちてしまっている部分があるのではないかという印象を受けます。しかし、挫折とか苦悩した過程を経ないで大学に進み、そのまま世に出た人が、素晴らし



松原勝也

(まつばら・かや) 助教授 室内楽ヴァイオリン

一九六三年東京都生まれ
一九八二年東京芸術大学音楽学部附属音楽高校卒業(第二六期生)
一九八六年東京芸術大学音楽学部器楽科ヴァイオリン専攻卒業
一九八九年東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了
一九九六―一九八八年東京音楽大学非常勤講師
一九九八年より東京芸術大学音楽学部器楽科助教授

い音楽家として聴衆に感動を与えるような演奏ができるかということが疑問で、今の若い演奏家には危惧を覚えています。何不自由なく、音楽的なインフォメーションや、優秀な先生からのテクニクとメソッドを与えられて、ピアノやヴァイオリンをとてもし上手に弾くという意味では今の学生たちは高いレベルに達していると思います。けれども、ヴァイオリンを弾く技術にしても、苦勞して勝ちとるといふか、本当に思い悩み、そして得たものが自分の実になっていくという積み重ねが、人格形成の面においても非常に大切なプロセスになっていくと思うのですけれども。

直面する課題について

山本 芸高の基本的な使命として、西洋音楽の専門的な演奏家・作曲家を育てることが第一の課題ですが、世の中が大きく変貌しているなかで、音楽をつくる人、それを再現して演奏する人のほかに、音楽を世の中と結びつける人、つまり一般の人々と専門的な人々をつなぎとめていくような人材が求められているんです。

ね。芸高・芸大生のなかにも、ピアノや管楽器といった専門を持ちながら、もう一つ別の専門を持ちたいと思うような人もいるのではないかと思うんです。大変なことなんですけれども、自分の専門を音楽療法で生かしていきたいというように、もう一つの専門を持つようなイメージも、これからは必要ではないかと思っています。

また以前からの念願なんです。唯一の国立音楽高校として全国から生徒たちが来ますので、寮の必要性を感じていきます。音楽の練習施設のしつかりした、そして責任を持つてお預かりできるような全寮制の施設が、五〇周年を迎えていまだできていないというのは最も大きな問題だと思っんです。経済的にも、東京で遮音装置のついた部屋を借りるのは大変なことなんです。ですから、練習室を完備して、夜間の練習もできるような全寮制の施設が本当に求められていると思います。

それからもう一つ、邦楽科が専門でできましたように、ジャンルを広げていくような方向性も、一つは大事だろうなと

思っています。

佐藤 寄宿舎のことは、私も最大の問題だと思っています。二年前に平山学長の指示で、「芸高のあり方検討委員会」ができました。各科の主任の先生が集まって一年間いろいろな見地から芸高の現状とよりよい未来について検討をしたんです。そのときにも、寄宿舎の問題は非常に重要であるとの認識で、私立の音楽大学の寄宿舎をいくつか見学に行きました。解決しなければならぬ大きな問題なんですけれども、まだ手つかずにいるんですが、なんとか実現に近づけたと思います。

それから邦楽専攻についてなんですけれども、毎年一回、芸高の定期演奏会をやっているんですが、邦楽を前半に置いて、後半にオーケストラや合唱という二部構成だと、邦楽を目当てに來た人は前半で帰ってしまい、休憩を挟んで洋楽のお客さんと入れ替わるんじゃないかと当初は危惧していたんです。それはとんでもない思い違いで、実際にやってみると洋楽の演奏会の前に邦楽があるというのはなかなかいいものなんです。旧奏楽堂での五〇周年記念演奏会のときも、最初に邦楽を置いたんですけど、赤い毛氈を敷きますと祝典的な感じが出て本当に素晴らしいと認識を新たにしました。

山本 芸高の伝統のなかで、この定期演奏会のレベルの高さは誇れると思うのですが、特に合唱が素晴らしいんです。オーケストラの合唱をピアノ科の生徒たちが受け持まして、声楽の専門家のような声の大きさといった面では及ばないで

すが、意欲が本当に伝わってきて感動的です。この伝統はぜひ続けていってほしいと思います。

粕谷 寄宿舎については、ぜひ実現にむけ足を踏み出していただきたいと思えます。ときどき地方に行きますと、お母様方が、芸高を目指させたいけれども、東京で一人で生活させるのが不安だとおっしゃる。だから、高校の間は手元に置いて、大学からにしますというようなことを耳にすることが多いんですね。ですから、実力があっても、二の足を踏まれるご父兄は多いと思います。

特にピアノですと、楽器が大きいですから、どうしてもスペースが必要になってくる。安心して勉強もさせられて、生活もコントロールをしてくれる人たちがそばにいる環境があれば、もつと優秀な生徒さんたちが地方から集まってくるんですね。どちらかといえば、人間的に地方の人たちは、都会っ子よりも強いですね。小さい頃から、レッスンのために北海道とか遠方から飛行機に乗って来たりするわけです。そういうことを自分でコントロールしながら取り組めるというのは、心構えが違ってくるんじゃないかな。

佐藤 芸高の問題ではなくて、芸大の問題かもしれませんけど、高大一貫教育といえますか、私の専門の作曲では芸大に推薦入学の制度があるとてもいいと思うんです。二年生の頃になるともう新しい音の世界に興味をもち自由に作曲しはじめ、三年生ですでに相当高いレベルのところまで行っている優秀な生徒もい

る。ところが、入試というものがある以上、どうしても三年になると受験のための勉強をしなければならず、それに時間とエネルギーを大きくとられてしまつんですよ。そういうことがなければ、どんな新しい作曲の道を進んでいくことができるのに、入試のためにそこで足踏みしてしまつということがあるんですね。優秀な生徒は推薦入学で芸大に進めれば、どんどん効率よく才能を伸ばしていけるのではないかな、せっかくの附属高校でありながらと残念に思っているんですけども。

恵まれた環境への自覚

松原 音楽家の社会における位置、自発的に社会とどうやってかわりを持つかという点から言いますと、実現可能かどうかは別にしまして、高校のうちから施設や学校のようなところで演奏をする、今はやりの言葉で言うと「アウトリーチ」ということでしょうか、そういうことは決して悪くはないと思つんです。

学校のなかだけで行われる発表会とはともレベルが高くて素晴らしい。だけど、

貯えがちゃんとしていなくても、社会とのかかわり持つということ、高校のうちから少しでも自分のなかに持っている、と、大学へ行って、あるいは世の中に出たときに、自分と社会との距離を近づける努力が生まれてくるのではないのでしょうか。

やはり、感覚的には、一般の人とわれわれはかなり乖離があると思つんですね。自分は孤高の道を行くんだというだけではなく、世の中に媚びるとかいうことではなくて、自分がどうやったらたくさんの人に対して理解してもらえるのかという努力をする芽を、高校生のうちから少し育んでいくというのもいいんじゃないかなという感じがしますね。

佐藤 芸高がスタートした頃は、すごく純粋に、素朴な情熱を持った先生方が始められたと思つんですね。しかし五〇年も経過し、芸大も大きく変わり、教育や運営の仕事が増え先生方がとても忙しくなつた。そこへもってきて、芸高と芸大のサイクルが必ずしも一緒ではないから、芸大が夏休みに入ってもまだ芸校生のレッスンだけはしなければならぬ、とい

うようなことがある。レッスン時間の設定にも当然高校生としての制約が伴う。芸高とかわるということは、単にレッスンだけでなく、数々の業務を引き受けるということでもある。科によって事情は異なるでしょうが、先生方のなかには芸高とのかかわりが少し荷が重いと感じている向きがあるのも事実です。

このようなことについて、何かよい方策を講じることはできないものでしょうか。

粕谷 芸高のなかでは、大学の先生方がいらして、専門はもちろんです。教科に関しても素晴らしい授業をしてくださっているわけですが、生徒のなかにはどこまでそのことを認識して授業を受けているかと、首を傾げたくなるようなこともなきにしもあらずという気がします。生徒たちはたくさんさんの志願者のなかから選ばれ、こういう恵まれた環境を与えられた人間であるという認識をもう少し持つてほしいなと思つのです。

芸高へ入りたくても入れず、場合によっては音楽の道もあきらめなくてはならない人たちがいるわけですね。そんな中で、自分たちはこの環境を与えられた数少ない人間なのだから、いろいろなものを吸収しようとする気持ちを持ってほしい。もともとと貪欲に勉強してほしいという気がします。高校時代はいちばん大事な時期なのですから。

(二〇〇四年十一月三〇日附属音楽高等学校校会議室にて)



山本文茂

(やまもと・ふみしげ) 教授 音楽教育

一九三八年愛知県生まれ。

一九六一年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。

一九六一年東京都立高等学校教諭(南葛飾・豊多摩・小松川)。

一九七六―七八年福岡大学教育学部助教授。

東京芸術大学音楽学部助教授を経て一九八六年より教授。

一九九七年より二〇〇〇年まで東京芸術大学音楽学部附属音楽高校校長(併任)。

附属音楽高等学校 五〇年史

海老原 直秀

一 創設期

(一) 設置の構想と設置申請

学校教育法の施行に伴い、東京音楽学校においては一九四六(昭和二十一年)年から大学昇格を念頭に置いた新制度案についての審議が行われ、そのなかで早期教育の施設についても検討された。翌四七年一月の教授会では大学のカリキュラム案と高等学校の新設について審議され、同年五月には改めて音楽高等学校の併設について審議され、さらに「東京音楽大学」に附属高等学校を併置するという新たな案について教科科目や単位数等についての詳細な検討が行われた。その結果は同月中旬に「学校改革案」としてまとめられた。この構想は高校のほかにも中学校、小学校をも含むものであり、附属高校の教科科目については作曲、声楽、ピアノ、弦、管打楽器の専攻科目のほかにもソルフェージュ、合唱、合奏、音楽概論等が週一五時間となっている。なお、邦楽専攻については審議未了につき保留となっているのは重要である。一九四九(昭和二十四)年五月に附属施設として附属音楽高等学校を含む「東京芸術大学設置申請書」が文部省に提出されるが、附属高校については認可されなかった。この中で現在と異なるのは普通科目のなかに「図画」という美術科目の選択が可能となっている点である。なお、音楽大学以外の進学希望者に対して、第二学年から普通科目重視の別のカリキュラムが設けられているという極めて現実的な教育的配慮が見られる。また、生徒の約半数を収容できる寄宿舎を将来設置する予定と明記されているのは将来を創設準備の当時からすでに見通す卓見である。五二年六月の教授会で「専攻科、附属高校設置案」が審議され、山田長谷川、田尾、矢田部、福井、下総の六教官が委

員に選出され、その後、附属高校設置の努力が続けられるが、文部省の不認可がネックとなっていた。ところが、五年後に突然、転機が到来する。一九五四(昭和二十九)年三月三十一日に「国立学校設置法」の一部が改正され、「国立学校設置法施行令」が公布される。すなわち、国立学校の附属施設の新設、廃止が、以後、この政令だけで可能となった。こうして、国会審議なしで東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校の設置が認可されたのである。しかも、緊縮財政下、予算〇での新設であった。カリキュラムは「学校改革案」から声楽専攻が削除され、邦楽専攻は設置されなかった。初代校長に城多又兵衛教官が就任し、北海道学芸大学から新野仁助氏が音楽学部講師に着任し、附属高校勤務となる。また、伊藤良平事務官が事務主任となり、ほかは全て芸大教官が併任して、附属高校の専任教員は〇であった。附属音楽高校の設置以前から約五年間にわたり、文部省と折衝にあたった城多又兵衛氏の存在は附属音楽高校創設期の中心人物の一人として忘れられない。

イタリアに留学し、帰国後、幼児教育に携わり、戦後、下総院一氏とともにソルフェージュの早期教育にかかわった彼は東京音楽学校教官として大学への昇格の審議の時から附属高校の併置を熱心に主張した。

二 お茶の水期

(一) 創生期(一九五四年～一九六七年)

新野氏は着任後、教育と運営にあたるが、国立学校設置法施行規則の改正に伴い、一九五八(昭和三十三年)年に教頭となる。開学以来、創成期の二年間、彼は附属音楽高校運営の中心人物であり、音楽高校としての基礎づくりに励んだ。五五年に事務官からの配置転換で和久和一氏が国語の

専任教諭となったが、専任教諭はこの一名のみではかたは大学教官が併任で勤務した。初年度から毎年、大学事務官の定員を一名ずつ附属音楽高校の専任教諭に配置転換した結果、五六年には専任教諭三名となった。五七年には附属音楽高校の運営に関することを審議する機関「附属音楽高等学校運営委員会規則」が制定され正式機関となる。六一年六月には教官定員が三名増員され、専任教諭六名体制となる。六三年には外山浩爾(音楽)氏が専任教諭となり、六五年に教頭新野仁助教官が附属高校専任、戸塚岸男事務官が事務主任となる。同年十月に梅谷進教諭(音楽)が着任し音楽担当教諭一名となる。ところで、開学当時から入試科目には一般学科がなく、専門実技科目と聴音のみであったが、一九六四(昭和三十九)年に国語と外国語が入った。開学当時から、カリキュラムには選択科目に美術があり、外国語については一、三年次から独語、仏語も選択できるようになっていた。これは七三年に新カリキュラムに改訂されるまで続く。当初の四七年「学校改革案」に見られた声楽専攻はなくなっている。五六年七月に仙台、盛岡、釜石、宮古の東北各都市に第一回校外演奏旅行を行い、好評を博している。

(二) 清野イズムと形成期(一九六八年～一九八五年)

一九六八(昭和四十三)年に都立高校に勤務の清野澄夫氏が教頭に着任し、六九年には教官定員一名増で本多英男教諭(体育)が着任する。同年七月には第一学年を対象に千葉県若井海岸で初めての臨海学校が開かれ、翌七〇年二月には長野県菅平で初めてのスキー教室が開かれる。六〇年以後、中断していた校外演奏旅行は七一年に再開され、土浦市で開催された。七二年から入試科目に楽典と社会が加わる。七三年からの新カリキュラムでは美術がなくなり、外国語も英語のみとなる。七四年五月長野県菅平で初めての春季校外合宿が行われ、以後、全学年必修の行事となる。七八年から入試科目に数学が加わり、以後二年間は国語、英語、社会、数学の四科目であったが、八一年度入試からは社会がなくなり、以後、国語、

数学、英語の三科目となる。八〇年によつて養護教諭が定員化され、高松保子養護教諭が着任する。七六年には糸川英夫氏を招いて講演会を開くなど音楽実技のみならず、当時はスポーツや教養を重視した教育が行われ、遅刻、欠席を厳しく戒めて基本的な生活習慣を身につけさせ、授業態度、学校生活全般における規律を徹底し、校外合宿訓練による心身の鍛錬と普通科目の重視、実力試験の実施、講演会の開催などによって、「音楽家養成のための全人教育」を目指した「清野イズム」は創生期後の附属音楽高校を十七年間にわたり、リードとして形成したのであった。

(三) お茶の水から上野移転期(一九八五年～一九九四年)

一九八五(昭和六十)年からの十年間は「清野イズム」の継承期であった。一九八九(平成元年)十一月に第一回定期演奏会(響和会主催)が旧奏楽堂で開催された。なお、九〇年十月山梨県都留における校外演奏会を最後として校外演奏会は行われなくなった。九一年十一月には全国音楽高校協議会全国大会が附属音楽高校を会場校として開催された。

九四年十月には創立四〇周年記念同窓会演奏会が力ザルスホールで開催され、同年同月に記念定期演奏会が北とびあ「さくらホール」で開催された。

お茶の水校地から上野校地への移転は附属音楽高校現場からの発案ではなく、当初は、むしろ附属音楽高校は移転に反対であった。しかし、取手校地への移転案の検討などの紆余曲折の後、最終的には上野キャンパスの現在地に移転が決定した。お茶の水校地時代は併任教員が上野からお茶の水まで移動して授業を行わなければならなかったが、移転後は同じ上野キャンパス内で授業や会議なども可能となり、結果的には上野移転は大学、附属音楽高校双方にとってプラスとなった。

三 上野時代(一九九五年～)

(一) 激動の十年間

一九九五(平成七)年四月に新校舎が落成し、

永富正之校長、梅谷進副校長の下に、上野キャンパス時代が開始する。この年、筑波大学附属高等学校高等部音楽科主任であった海老原直秀教諭が異動して着任し、教務主任、九六年には副校長となる。永富正之教授は九一年四月から九七年三月まで二期六年間、附属音楽高校校長を勤めた。その間音楽科目を相互に関連させて総合的な教育を展開する「永富プラン」を作成した。例えば第二学年はポリフォニーをテーマとして音楽理論では対位法、フーガを学習し、一方、音楽史では中世、ルネサンス、バロックを学習し、ピアノ初見でも対位法的作品を教材とするなど、上野時代の開始とともに音楽科目の教育は本来的にはこの「永富プラン」に基づいて展開してきた。以前から大学邦楽科の構想にあったが実現していなかった邦楽専攻設置について、山口五郎邦楽科主任教授、増淵任一朗助教授、上参郷祐康楽理科教授、永富正之校長、海老原直秀副校長らが中心となって研究協議を重ねた結果、教育の先導的試行を行うべき国立附属校として邦楽（筆曲）専攻を設置し、その教育の実践と研究を行うことが社会的責任であるとの認識に達した。九七年四月に山本文茂教授が校長に着任し、九八年に邦楽専攻が設置された。その実現は附属音楽高校設置以来実に四十四年後のことであった。九九年四月に生田流、山田流計二名の筆曲専攻生が入学し、邦楽教育を開始した。二〇〇〇年には尺八、長唄三味線、邦楽囃子（小鼓、太鼓、太鼓）が設置され、〇一年度には邦楽囃子、〇二年度には尺八と長唄三味線の専攻生が入学した。〇一年には邦楽囃子の笛専攻が設置された。なお、創立以来、声楽専攻が設置されていなかったが、〇〇年四月に佐藤眞教授が校長に着任し、〇一年に声楽専攻が設置された。附属音楽高校創立以来、四七年後のことである。〇三年度より生徒募集を開始し、〇四年度には声楽専攻三名が入学する。

間一回であった附属音楽高校運営委員会がほとんど毎月一回開催されるようになった。また、入試運営委員会が入試前に必ず開催されて、定員確保の方針が確認されるようになり、以後、入試における定員割れは生じていない。こうしてむしろ、大学との連携が推進され、学校運営が円滑になった。災い転じて福となったのである。一九九七（平成九）年四月に附属音楽高校の過去の寄付金などに関する会計運営、受験生指導などに関する問題がマスコミでとりあげられ、附属音楽高校は鋭い社会的批判を浴びた。山本校長、海老原副校長、鈴木実事務室長は以後三年間にわたり、関係事項につき詳細な調査活動を行い、この問題进行处理した。この事件は附属音楽高校の教育と運営に苦い教訓となり、その総括と反省に立ち、健全な学校運営を目指して再出発した。〇二年三月には国立大学附属校として当然のことであるが、それまで実現していなかった懸念の「研究紀要 第一号」を発行した。〇三年十一月には組織加盟している研究協議団体の全国音楽高等学校協議会全国大会が本校を会場として開催された。これは十一年ぶり二度目の開催である。その際、東京地区の理事校生徒有志による合同オーケストラが編成され、音楽堂で演奏が行われ、音楽高校教育の向上と協力に貢献できたことは有意義であった。〇二年六月の公開実技試験のピアノ専攻の発表は音楽堂で開催され、〇五年度にはピアノと弦楽器が音楽堂で開催される予定である。聴衆多数のため、附属音楽高校二〇一ホールでは手狭であった問題がこれで解決を見た。〇四年五月には英国青少年音楽フェスティバルより招待を受け、ロッチデイルトン、ケンブリッジにおいて室内楽の演奏会に出演し、交流を行った。同年十月には沖縄県立芸術大学と交流演奏会を開催し、琉球音楽と西洋音楽、邦楽演奏による交流を行った。〇五年秋には札幌でアマチュアオーケストラとのジョイントコンサートに出演する予定である。九〇年以後行われなかった校外演奏旅行はこうして一五年ぶりに復活したのである。この間、〇一年には英語専任教諭二名のうち一名の中川泰成教諭が退職した後を非常勤講師が担当し、沼田宏行教諭（ピアノ）

が着任し、〇四年には数学担当の大澤幾子教諭が筑波大学附属高校への異動後、非常勤講師が担当し、安富洋教諭（弦）が着任して、音楽担当教諭が以前の二名から四名体制になった。また、保護者の活動を忘れてはならない。後援会の教育後援活動を通して保護者会は毎年、校外台宿やオーケストラの件費などのほかに、図書室の整備や図書室業務の件費を支える等、附属音楽高校教育に関して多大な貢献をされてきた。〇三年二月にはオルガン（草刈オルガン制作）が寄贈された。〇四年に附属音楽高校は創立五〇周年を迎え、十一月に記念定期演奏会、卒業生演奏会（室内楽オーケストラ）シンポジウム、オープンキャンパスを開催した。

（二）附属音楽高校の将来像

平山郁夫学長の下に、東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校の在り方に関する調査検討委員会が設置され、〇二年四月から〇三年三月の一年間にわたる調査検討の結果が「附属音楽高等学校の在り方について」としてまとめられた。そこには大学と附属との連携として、大学の授業への附属音楽高校生の出席、内部推薦制度と飛び級制度の導入、中学生を対象としたセミナーの実施、寄宿舎の設置などが掲げられている。また、当初附属音楽中・高等学校案も検討されたが、結局台東区内において週末に中学生などを対象として音楽の基礎指導を行い、音楽の愛好家を育てて社

会貢献をする「芸大音楽専門基礎教育プロジェクト」案が作成された。地方に出張してセミナーを行い、上野キャンパスあるいは地域においてこのような教育活動を行い、地方演奏旅行によって各地方への文化的貢献を行うことが附属音楽高校の教育と学校の存在と教育の紹介、情報宣伝にも役立つのは明確である。約半が首都圏以外の出身者で占められ、高い家賃を要するアパート暮らしを余儀なくされ、保護者の経済的負担が強いられている。これらの生徒が安全で健康的な環境で勉学に励むためには寄宿舎の設置が必要である。その実現がすぐには困難ならば、一定のアパート業者などと提携する民間提携型の方法も考える必要がある。この調査検討委員会の答申案を絵に描いた餅に終わらせず、大学全体のヴィジョンとして、ぜひ、その実現に向けて前進して欲しい。可能性に充ちた生徒たちを全人的に教育していくには専門実技、音楽科目のみならず、普通科教育、体育など総合的な視野に立ち、学校生活における生徒指導をさらに徹底していかなければなるまい。お茶の水期にそうであったように大学の併任教員の協力とともに何よりも附属音楽高校専任教員の教育への熱心な取り組みが望まれる。独立法人化後の厳しい時代に突入した今、特に、附属高校専任教員間のメンバーシップ、運営の実質的責任者である副校長の強力なリーダーシップが今までも増して必要とされるのである。

（えびはら・なおひで／附属音楽高等学校副校長）



お茶の水時代の校舎(1980年代初め)



附属音楽高校ホール



附属音楽高校アンサンブル室

卒業生・在校生インタビュー

藤家 溪子

ふじえ・けいこ 一九六三年京都府生まれ
附属音楽高校第二六期生。作曲家として
「尾高鯨」を一度にわたり受賞するなど高い評価を得ている。
「五〇周年記念委嘱作品」として「東へ」を作曲した。



「東へ」は、三曲からなるピアノのための組曲です。ツルゲーネフ、ネルヴァル、松尾芭蕉という三人の文学者の足跡を追うよう、ヨーロッパから中東、日本へと旅するこの曲の底辺には、実は「葛藤」というテーマがあります。ピアノという楽器や日本人の音楽家が持っている「葛藤」を曲にしてみました。

私自身、ピアノの響きに洗礼を受けて音楽の世界に進んだのですが、作曲家の立場から、この楽器が果たしている役割に対して批判的な意識で問い直そうと試みたのです。音楽の現状は、ピアノという楽器を保守的に扱うあまり、豊かな世界の、一部のところにまとまってしまっているのではないかと。教育も、とりこぼしてしまっているのではないでしょ

うか。

また、自分のルーツというものをどう表現するのか、あるいはしないのか、という「葛藤」もここには込められています。日本人は外国に行ったときに「あなたの国の音楽は？」とたずねられて、はじめて邦楽を自覚し、自国の文化を見直してみると思っています。今、芸高にも邦楽はありますが、私自身、当時は邦楽との接点の持ちようすらわかりませんでした。また日本人が西洋音楽を演奏するときにつきまとう「信仰」の問題というの、頭に浮かびました。「芸高五〇周年」を機会につくったこの曲は、芸高、そして芸大で学んできた私が、今日まで抱き続けてきた思いの一部でもあるのです。

ヴァイオリンを始めたのは四歳のときでした。祖父が趣味で弾いていたヴァイオリンを私がどうしても弾きたくなって、両親にせがんで小さなジュニア・オーケストラに入れてもらったのです。

芸高に入学して、いちばん嬉しかったのは、いろいろな楽器や作曲専攻の友達と出会えたことです。みんな自分の考えがあつて、しっかりしていることに驚きました。

初めて友達の演奏で邦楽を聴いたときには、とても感動しました。また定期演奏会で、みんなで真剣に意見を出し合い一つの音楽をつくりあげていったことは、かけがえのない大切な思い出となりました。

去年（二〇〇四年）の五月に、「英国青少年音楽祭」に参加させていただいたことも貴重な経験でした。

地域の小学校で演奏させていただいたワークショップでは、子供たちがとても真剣に聴いてくれました。そして、夜の音楽祭には、家族の方々も一緒に来てくださったのです。ヨーロッパでは音楽を聴くことは特別なことではないんだ、ということが印象に残りました。

まだまだ勉強の身ですが、将来は音楽を日常生活に溶け込んだ、自然にみんなが楽しめるものにするのが、私たちの役割の一つだと思っています。

瀧村 依里

たきむら・えり 一九八六年兵庫県生まれ
附属音楽高校第四九期生（三年在学中）。



東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校 創立50周年記念事業

2004年11月3日（水・祝）**同窓生によるソロ・室内楽コンサート**

東京文化会館小ホール 開演15:00



11月6日に旧奏楽堂で行われた芸高生による邦楽演奏

M.ラヴェル：序奏とアレグロ

シュレイファー遠藤弓子（ハープ） 藤井香織（フルート） 三界秀実（クラリネット） 野口千代光（第1ヴァイオリン）
川口静華（第2ヴァイオリン） 中島久美（ヴィオラ） 浅岡洋平（チェロ）

F.プーランク：ホルン・トランペットとトロンボーンのためのソナタ

堂山敦史（ホルン） 杉本淳一郎（トランペット） 西岡基（トロンボーン）

藤家漢子：東へ（50周年記念委嘱作品）

江口玲（ピアノ）

F.シューベルト：ピアノ五重奏曲「ます」

松原勝也（ヴァイオリン） 百武由紀（ヴィオラ） 菊地知也（チェロ） 西山真二（コントラバス） 迫昭嘉（ピアノ）

メシアン：アーメンの幻影より

木村かをり、野平一郎（ピアノ）

11月5日（金） 芸高オープン・キャンパス

附属音楽高等学校内 [芸高ホール] [203アンサンブル] にて 14:00～16:30

芸高生による演奏

旧東京音楽学校奏楽堂 開演17:00

箏曲「編曲 八千代獅子」/ 長唄「太鼓の曲」/ J.M. ダマーズ：五重奏曲/ 平川加恵：フルート、トランペット、ピアノ及び弦楽合奏のための協奏曲風組曲

シンポジウム「芸高の50年を振り返り 21世紀を展望する」

旧東京音楽学校奏楽堂 開会18:30

加納民夫（司会・コーディネーター） 金山茂人、外山浩爾、神野峯一（以上、パネリスト）

11月6日（土） 50周年記念式典

東京芸術大学奏楽堂 開会14:00

第16回芸高定期演奏会

東京芸術大学奏楽堂 開演15:00

第1部 邦楽合奏

宮城直雄 作曲：箏曲「遠砦」

邦楽科生徒（箏、三絃、尺八）

九世 杵屋六左衛門 作曲：長唄「越後獅子」

邦楽科生徒・芸大学部生（長唄、三味線、邦楽囃子）

第2部 オーケストラと合唱

ベートーヴェン：交響曲第5番「運命」ハ短調 Op.67

佐藤功太郎（指揮） 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校生徒

ヘンデル：オラトリオ「メサイア」より

佐藤功太郎（指揮） 木部敏司（合唱指導） 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校生徒

11月7日（日） 同窓生オーケストラコンサート

東京芸術大学奏楽堂 開演15:00

J.S. バッハ：ブランデンブルグ協奏曲 第5番 二短調 BWV.1150

野原みどり（ピアノ） 小林美恵（ヴァイオリン） 佐久間由美子（フルート）

高橋裕：2群の箏と弦楽合奏のための“天籟”（50周年記念委嘱作品）

佐野美和、守時昌美、大西愛子、前川智世（箏）

佐藤真：ピアノ協奏曲

永野英樹（ピアノ）

I. ストラヴィンスキー：火の鳥